

市長室：対話の記録

要旨

開催内容の公開

開会にあたって

対話内容

- ・はじめに
- ・住環境と仕事について
- ・子育てと学校
- ・移住希望者の意識の違い
- ・旭川の魅力・長所の再発見
- ・ありのままの旭川を伝える
- ・地域コミュニティと移住希望者の橋渡しとして
- ・観光や修学旅行と移住の関連性

閉会にあたって

対話集会を終えて

第1回目となる今回のまちづくり対話集会では、旭川周辺への移住希望者への支援サービスの提供を目的として活動している共同事業体の「カムイミンタラの伝道師」の皆様と懇談させていただきました。



日時	平成18年12月23日(土) 午前10時30分～午後0時
場所	秘書課 第1応接室(旭川市役所総合庁舎2階)
相手団体	カムイミンタラの伝道師
出席者	西川市長 カムイミンタラの伝道師(敬称略) <ul style="list-style-type: none">・井下佳和(有限会社アグリテック)・元由視敏(株式会社ジャルセールス北海道)・西野俊典(旭タクシー株式会社)・藤田進(有限会社アールホーム)・北口浩之(株式会社アイリンク)

対話の内容

開会にあたって

市長のあいさつ

今日は貴重な時間をいただいて市役所までご足労いただき、どうもありがとうございます。

今朝の新聞にも、本日の「まちづくり対話集会」の開催を報道していただきました。私の選挙公約でもあり、市民の皆さんやマスコミの方々も注目いただいておりますが、国のタウンミーティングではやらせ問題など色々ありますけれども、この「まちづくり対話集会」は、本来のまちづくりの前提である市民の皆さんと行政との対話を、実のある形として継続してやらせていただきたいと思いますと考えております。

今日は「カムイミンタラの伝道師」の皆様をお願いして、このような機会を作っていただきました。本当にありがとうございます。

皆様の活動につきましても、これまでに新聞等で報道されておりますので、私も拝見しております。これからの旭川の将来像やまちづくりの中で、皆様のアイデアや思いをより具現化していくために、行政としても応援させていただきたいなという思いで様々な意見交換ができればと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

本日は、司会進行を置かずいろいろと懇談できればと考えております。最初に私が開会の挨拶をさせていただきましたが、代表をされている井下社長から一言お言葉をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。その後、本題に入ろうと思います。

井下代表のあいさつ

この度は、第1回目の「まちづくり対話集会」ということで、「カムイミンタラの伝道師」をご指名いただきまして、ありがとうございます。

私たちは中小企業家同友会のメンバーで、元々「カムイミンタラの伝道師」はジャルセールスの元由さんが企画していました。偶然私が1年前から国土交通省の勉強会に行くなどしていた時に、元由さんが企画書を持って来ていて、まちづくりに良いことだからやりましょうということでした。旭川には様々な人が出入りしており、移住・定住してもらうことによって地元の人たちと都会の人たちが交流し、新しいビジネスモデルを創り上げ、活性化させていこうということで始まりました。

昨年2月頃から毎回飲み会をして、8月くらいから本格的に活動しました。今まで多くのマスコミからご支援をいただきながらここまでやってきました。現在では8組23名が旭川とその近郊に移住されていて、皆さん非常に活発に活動されています。時々会いますが、やはり旭川に来て良かったと話しています。

※以下、「カムイミンタラの伝道師」の皆様については敬称を省略しています。

対話内容

はじめに

市長： 私も思うのですが、旭川とその近郊はすごく環境がいいというのが一番の売りであって、そしてまた、医療福祉が集積されたまちですので、本州から移住・定住という中で非常に有利になると思っています。皆様の活動に対して、もっと頑張ってもらいたい、市長就任前から一市民として見させていただいていました。市としても応援させていただき、今後の方向性などで、もし提案等ありましたらお聴かせいただければと思います。

北口： 現在の市の担当の皆さんとは非常にいい関係で事業に取り組んでいるので、そういう意味では、民間と行政が本当に一緒になった取組の事例として、素晴らしい形で動いているというのが現状です。どうしても移住をテーマに活動するとすると、一人の人生を左右するような活動をしてるわけですから、私たち民間の事業者だけではどうしても軽すぎるとかそういうきらいもありますので、今後も行政にしっかりサポートしていただきながら、私たちが補いきれない部分、人間が暮らす根幹に関わる部分で行政に担当していただかなければならないところは当然でできますから、そういったところを密に情報交換して仕事をさせていただければと思います。私たちは民間事業者ですから、やはり事業の継続を図るためにある程度の収益性を作らなければいけないとか、そうした部分で苦勞するところも多いものですから。ただ、それゆえに自由で大胆な発想ができるという部分もあると思いますので、そういった民間のフットワークの良さと行政のしっかりした信頼性の部分がうまくかみ合った形で仕事ができればいいと思っています。

住環境と仕事について

市長： 移住されてくる方に対して、こういった物件があるとかこういうPRの仕方があるとか、市でお手伝いできることはありますか。

- 北口： 皆さん、やはり田舎物件を望まれているところがあるんですね。いわゆる住宅地の物件というよりは、どちらかというと農村部というか、郊外の住宅をお探しの方が非常に多いんですが、それに伴ってどうしてもクリアしなければいけない問題が1つありまして、農地法に絡んだ農地の取得とか農地の売買などの問題がどうしてもでてきてしまいます。
- 藤田： 建物のことは、空いている家を借りるのであれば問題ないですが、土地の場合は、借りるのも売買するのも大変難しいです。優良田園住宅というのがあります。移住を望む方のニーズに合っていないのかなと思うんですよね。
- 市長： 優良田園住宅の将来像について、私どもも何かいい方法がないかなとずっと思っているんです。どういうふうにやったらニーズに合っていくのかなと。
- 藤田： どちらかというと大造成をするというよりは、現状のままで、暮らせる環境だけをそここの場所で作られればいい、そんな感じがします。だから、自然のままというのがいいみたいですね。荒地の山の中で、あとはまああの環境でいいという人もごく少数いて、その辺のバランスと希望に合った中で、今言った農地法や農振法とかいうのがあるから、その辺がクリアできるのかどうかということですよ。優良田園住宅を造るにしても、本当の団地にしてしまっただけという人と、そうじゃないという人がいるんですよね。だから、ある程度の中環境の中で、それぞれの違ったパターンをクリアするという方向に考えなければいけないと思います。それが大きな課題だと思います。
- 市長： 優良田園住宅の建物や土地の規制というのは結構厳しいですよ。
- 藤田： 厳しいですね。例えば嵐山の優良田園住宅の場合は、アパートというか共同住宅的なものは建てられないということのようですから、個人が個人のために使うものでなければいけないという枠ができています。ということは、多用途で、例えばレンタルハウスのようなものにはならないということです。そうすると、そこで自由に交流しながら資源を使いあうということになるので、そこも大きな課題だと思います。だから、その辺の規制の、どこをどうするかということについての突破口を作ってほしいなという気がします。できればその時に意見を聞いてほしいですよ。
- 元由： 団塊の世代が求めているものは、リタイアメントビレッジに住むことじゃないんです。今、行政サイドで田園住宅を造成されていますが、ああいうイメージを求めているわけではないことが分かりました。自然の中に点在する形というイメージなんですよ。優良田園住宅ですよって、ここにみんな集まらねっていうものではない。それは逆に嫌われる。
- 北口： 2地域居住という考え方がありまして、夏の気候のいいときはこちらで過ごして、冬は向こうに帰るといって、ちょっと別荘的なスタイルにはなると思うんですけど。本来の姿ではないかもしれませんが、そういった形も今後の一つのあり方として結構でてくると思います。優良田園住宅の建物がうまく融通のきいた形で使い回しができると、そういった人も増えてくるのではないかなと思うんですけどね。

市長： 民間の不動産会社などと連携して地域づくりというのができれば、魅力が上がるかもしれないですね。

西野： あと、移住されてきた家族で、ネットで仕事されている方が望まれるのが、まずは通信網なんですよ。田舎暮らしをしたいけど、ADSLは最低ほしいねとか、そういうことを希望される人が多いので、田舎こそ高速通信網が必要であるというふうに思います。

藤田： 住宅探しの中で、それだけで駄目になる方もいるんですよ。せめてADSLですね。ISDNでは遅くて、今の容量の通信では画像が送れない、見られないということです。来ていただいた方に、ある郊外を紹介したのですが、場所はそれなりに気に入っていただけただけど、結局ネットがISDNしかなく、アパレルキヤドでファイルのやり取りをするのに通信ができないのはだめということでした。

西野： 団塊の世代とは言いながら、実は若い夫婦が一番移住したがってるんですね。

北口： 私たちも、最初は団塊の世代の皆さんが、2007年以降の定年退職を迎えるという動きの中で活動を始めたんです。これまで、実際に移住された方は、ほぼ30代から40代の皆さんがほとんどなんですね。実際に、すでに土地を買って、移住を予定している方の中には、いわゆる団塊の世代もいらっしゃるんですけど、現実に移住されてきているのは30代の皆さんとか、11月に東京で説明会をやったときも、私たちのブースで説明を聞くのはほぼ若い方ですね。

藤田： これが皆の思いとちょっと違ったところですね。希望者がもっと若い層にいてるんですね。

市長： 仕事はもってないんですか。

西野： そこだけなんですよ。仕事があればすぐ来たい。

井下： 仕事を探してほしいと履歴書送ってきている人もいて、今、真剣に対応しているところです。結局、先程、話のあったアパレルキヤドをやっている方は、カムイミントラの活動の第1号なんです。八重洲でキャンペーンあったときにですね、八重洲まで来ていただいて、そのきっかけは北口さんが作ったホームページを見て、八重洲でキャンペーンやってるのならそこに行くということで始まったんですよ。下見ツアーで1月に来て、3月にもう移住ですから。実は、そのときの市の職員の機転が移住につながったんです。どうということかと言いますと、その方はアパレルキヤドをやっているから、移住してきても収益は変わらないけど、旦那さんの職がないことが一番大変だということでした。そのことを市の職員に話したところ、商工観光部の1ターン1ターンの登録業者を確認してくれましたが、旦那さんの希望する職業がなく、その後すぐ

にハローワークに照会してくれました。それで求人情報が入ったので、ツアー期間中に面接に行ったところ、1週間後に採用通知がきました。子供が4月から小学校に入学するということもあり、もう3月には移住が決まりました。これはやはり市の職員の機転ですよ。

市長： 私も市の職員もこれからも一生懸命頑張ります。
職業については、やっぱり一番心配ですよ。

北口： これから、そういう情報発信の部分でも、仕事の情報というか、私たち中小企業者が一番頑張らなければならない部分ではあります。UターンやIターンで人材を採ろうとしたときに、どうしても積極的な、例えば何月何日から来てくださいという求人の方にはならない部分があります。ただ、むこうから来ていただくということは、仕事の経験とかスキルも非常に高い方が多く、潜在的なニーズは非常に高いので、そういう企業側のニーズをきちんととりまとめて、それを発信していく仕組みを、市役所の皆さんにもお手伝いしていただきながら、作らなければならないと思っております。私たちは中小企業家同友会のメンバーで、その中で取り回しは可能なのですが、それ以外の企業の皆さんのご協力もいただきたいと思っております。

市長： その辺、市としてもいろんなPRとか、是非連携してやらせていただきたいですね。

西野： 旭川の印刷会社の話なんですけど、東京からいい人材が採れたので、もっと採りたいんだという話がありました。いい人がいれば仕事につながるということをかかっている企業が、どんどん人を採ることで、自分のところの商品を首都圏に売り込むとか、首都圏の仕事を自分のところに持ってくるという流れができるはずなんですよ。
仕事がないから仕方がないのではなくて、人と交流することによって仕事になる可能性が無限に広がるということが、この活動を始めてからあらためて感じています。

元由： 北海道の企業誘致は停滞してますよね。であれば、人の誘致をしたいというのが、そもそもの始まりなんです。その中でいろんな化学反応がおきることによって、いい方向に向いてくる部分があるのかなという発想で始めました。交流のないまちというのは衰退するというのが持論です。今、動物園が人気ありますけれども、これもいろんなところで真似されて、本当に頑張らないと将来的にお客さんがいなくなると思います。次のターゲットは、やはりこの大自然とか、いい都市機能を備える旭川近郊への移住だという発想で活動を始めました。

市長： 本当に環境はすごいと思うんですよ。
先ほどのADSLの件、どのあたりまでADSLが網羅されてるのか具体的にちょっとわからないんですけども。例えば、西神楽のほうで優良田園住宅をという話がありますが、ADSLは入ってないですね？

北口： 郊外ではADSL自体は距離によって使えなくなりますから、光ケーブル以外はないんです。だから、郊外では光ケーブルが引かれないかぎり高速通信は難しいという現状です。

市長： 例えば、郊外のある地域を重点的にそういう地域にしていこうとか、全地域は無理でもそこだけでも回線を強化するというのは可能性があるんですね。

井下： 東神楽のひじりの団地には、光ケーブルが入りました。通信会社の収益性という部分も含めてあると思うんですが、何百件単位とまとまった需要があれば工事ができるようです。

西野： 井下さんの会社のアグリテックが東川にあるんですけど。
実験的に、夏場の環境のいいときに、ビジネスでこちらに来てもらって、何か月間か滞在してもらおうというのを企画してます。
それは通信網があるからそういったことが可能だということなんです。

子育てと学校

北口： 人に来ていただくということももちろん大事なんですけど、私たちとしては、いかに人の行き来を多くするかということも一つのテーマだと思うんですね。
その中で、今、アグリテックの事務所スペースを使って、東京の企業に、例えば花粉や梅雨、本当に暑い時期などに、そこをサテライトオフィスのように使っていただくことができないかと考えてます。
できれば、それを郊外の廃校になりそうな学校でできないかと将来的に考えているんです。
それと同時に、うまくすれば家族で来ていただいて、その子どもたちが山村留学の短期版みたいな形でそこに通っていただくと、学校の機能も失われずにすむと思います。
地域から学校がなくなるというのは、その周辺の人たちにとって大問題だと思うので、そういうことができないかなと考えています。

井下： 移住希望者はそれを求めているんですね。
ちょうど子育て中の人か2組いるんですけど、2組とも、市内というかマンモス校には入りたくない。複式学級やってるようなへき地校に入れて子供を育てたい。そして近くの農家の空き家で暮らすということを求めているんですね。
都会では危なくて子供を育てられない、とある人が言っていましたけれども。

藤田： その辺の公園で遊ばせていたら、いろいろなことが起きて危ないので、子供の安全のために塾に行かせるようなんです。
こっちの農村地帯だと皆さん穏やかで大らかじゃないですか。

市長： やっぱ北海道と東京の人では違いますね。
さっきの廃校の話ですが、廃校する前にその後の利用方法をちゃんと提示しないと廃校してはだめだというような話もあります。
そういった意味で、市としましても皆さんから色々お知恵をお借りして、学校(廃校)の再利用という形で、なんか中継的なもの、またオフィス的なものや子供の遊び場的なもの、というようにいろいろ連携をとらせていただくことができれば非常にありがたいと思います。

藤田： 今言った学校の利用の仕方では、その時期だけ子供を集めて臨時の学校は可能ですよね。ただ、いろんな問題があるから簡単にいかないですけどね。

市長： それは地元の子供ということですか。

藤田： いえいえ、地域と一緒にでもいいんですけど、それ用に組むんですよ、臨時にね、短期間だけ組むと言うことも可能じゃないかと思うんですけどね。

市長： 一時的な転校みたいな感じですよ。

藤田： そして、その学校もいつもやってるんでなくて、そのときだけみたいなね。だから、ほかの決まったプログラムとは全然違う学校というのもまたおもしろいかなと思うんですけどね。

移住希望者の意識の違い

西野： 移住者は南に行く人と北に来る人で2つに分かれます。北に来る人は非常に計画的で目的意識があり、完全にリタイアして晴耕雨読の生活はせず、少しでも社会と関わっていたいんだという人たちが北の方に来るのではないのでしょうか。僕たちが最初進めてきた、人との交流が結果的にまちの活性化につながるだろうということにとっては、やはりいい人達が北を目指してきてくれています。南に行く人がだめだというわけではないですけどね。

井下： この間、池袋のサンシャインで「北海道フェア」をやったときに、たまたま沖縄のケーブルテレビが来ていて、我々もインタビューに参加したんですけど、そのときに話してましたが、南を目指す人は来ても1年位で帰ってしまうそうです。

市長： リゾート感覚で来るんでしょうね。

井下： 南は暖かいからいいですけど、北に来るなら身支度からきちっとしていないとだめですよ。

市長： 沖縄なら気軽な格好で暮らせますからね。

西野： だから本当にしっかりと計画を立てていますし、そして来られる方たちは今後増えてくるだろうという実感があります。ただ、黙っていたらなかなか旭川というものを見えてくれない、北海道はまずオール北海道で頑張るって、その後は今度、道内他都市との競争になるんですよ。そのときに旭川は負けていられないと気持ちでやっています。

旭川の魅力・長所の再発見

西野： 旭川は東京から、飛行機に乗って1時間半ぐらいで着きますからね。

市長： そうですね。飛行機だと東京の郊外より近いですよ。

藤田： 人間というのは時間で動きますよね。何kmあるのかなんて聞かないですよ。何時間かかるのって聞くんですよ。東京から旭川まで1時間30分ですよ、1時間30分でもう北海道に行けるんですよ。

井下： 我々の顧問的な立場でいろいろなアドバイスをさせていただいているフリージャーナリストの四方先生という方が話していたのですが、「もう札幌じゃないよ、これから絶対旭川だよ」と「絶対」を付けてくれたんです。それは何故かと言うと、京都出身の四方先生が話すには、今まではみんな京都に行ってたが、今はほとんどが奈良に行ってるよ。

市長： それは何故でしょうね。

西野： 要するに京都があまりにも観光地化しすぎて、奈良のほうが、本来旅人が求めているものに近くなったんじゃないですか。四国や九州の僕の友達も、札幌までは来るんだけど、旭川まではなかなか来ませんでした。最近よく旭川に来てくれるようになり、「意外と都会だね」、「落ち着いて静かなまちだね」と言っています。だから、「もう札幌じゃない」というのは、大都会はどこへ行っても同じ匂いがするからですね。

市長： 札幌は東京と変わらないですよものね。

北口： 去年の「全国の住みたいまちランキング」という意向調査で、2番目のまちが県庁所在地より上位にある県というのが、18近くあるんですよ。多分2番目のまちには、県庁所在地と比べて自由で気楽なところがあって、そういうところが魅力的なまちづくりにつながっているという結果なんじゃないかなということメンバーとも話していました。旭川はまさにそういう立場にあると思います。ですから、旭山動物園でこれだけ知名度が上がり、全国的な注目度が高まっている中で、本当に魅力的なまちづくり、自由度の高いまちづくりができれば、四方先生が話しているように、「札幌ではなく旭川だよ」というのを実現していけるんじゃないかと思っているんですよ。

元由： 名古屋にある企業が、北海道の農作物がこんなに安全だということが初めてわかった。食の安全が一番大事なことなので、是非これを社員食堂で使わせてほしいと話していました。

西野： 横浜の生協は、会員に食べさせてあげたいって話していました。何人ですかって聞いたら、何万人ですって。

市長： それは実現できそうなんですか。

元由： 需要と供給のバランスが問題ですね。値段は高くてもいいと話していました。

藤田： 安定供給しなければいけないですからね。その体制が整えば可能だということでしょうね。

- 市長： 夏場はいいですけど、北海道はどうしても冬場がネックなんですよね。ハウスし
かなく、安定供給できないですから。
- 井下： 冬場に観光客を呼ぼうと、この周辺をいろいろ回っているんですけど、この間本
州に行ったときに、雪はねの旅行を企画してくれないかと頼まれました。雪はね
だけではなくて、雪に埋めた野菜を、目印を頼りに雪はねをして掘り出してそれ
を食べてもらう。これは絶対やろうと思っているんです。
- 市長： 大根とかですよ。それは喜んでいただけますよね。
- 西野： ただ雪はねだけじゃつまらないですからね。大根が出てきたとか、キャベツが出
てきたとかすると楽しいですよ。
- 藤田： おいしいんですよ。保存状態が良ければ、おいしくなる野菜はたくさんあるん
です。じゃがいもは特に甘くなりますし。大根はみずみずしくなります。
- 市長： 去年、層雲峡温泉に泊まったときに、台湾からの団体のお客さんが、スノーダン
プを持って記念写真を撮っているんです。そういうものでも喜んでもらえるんだな
って思いました。
- 井下： なにも難しいことはなくて、自分たちが今まで体験してきたことを体験してもら
えばいいんだということが、都会の人たちと話していて教えられますね。
- 市長： 意外とヒントがあるんですね。
- 藤田： 自分たちは普通だと思っていることが向こうの人たちには感動なんですよ。来
てくれた人たちは空が広いことに感動しているんですよ。こういうことが財産のは
ずなんです。
- 井下： 新聞に載っていたんですが、旭川は人口に対する医者の数が多いんです。
市長もおっしゃっていたように、そういう安心の面も含めて旭川は宝の山なん
です。だから、「次は絶対旭川だよ」というのはそういうことだと思うんです。
- 西野： 旭川は市民に対するサービスが保たれていると思うんです。救急車にたらい回
しにされるとか、子供が具合悪いのに病院が着てくれないということがなくちゃ
んと着てくれますし。安全、安心って何？って言ったらそこですよ。
- 市長： ええ、医療救急体制ですね。
- 西野： 人口が50万人以下の自治体が一番市民が暮らしやすいと思います。移住して
きた方が学校の先生から直接手紙をもらったと感動しているんです。東京に
いると役所の人とはほとんど会話はしませんね。
- 市長： 別世界の人って感じですよ。

西野： 私たちも助けていただいておりますが、ツアーにきた方がそういう自治体の対応に感動しているというのはありますね。

市長： それは大変ありがたいことです。

ありのままの旭川を伝える

井下： 初めてツアーの方をお連れしたときは、団塊世代の人たちでしたが、とても感動しました。まず旭川全部を見てもらおうと嵐山に行きましたが、市役所の移住担当チームのメンバーがそれぞれごみやポットを持って、展望台でござを敷いて市内を見渡しながらいろいろ話をしたんです。旭川についていろいろと説明するなどして、あれは感動しました。

西野： 1人が移住のツアーに来ると、どうやらその友達が来たがるようなんです。金沢からいらっしやった方も、友達から「どうだった？」と頻りに電話がくるので、携帯の番号を変えたそうです。

井下： 「カムイミンタラの伝道師」は何も大それたことはしていません。ただ、来た人が失敗せずに長くいてほしいから、行政の人にもまちづくりの話をしてもらったりしています。最終的に判断するのは来る人であって、我々が強制するわけではないですからね。だから、その道案内をしてあげよう。例えば、1人で来ててもなかなか行政の人とは会えないですよ。そういうパイプを我々が作ってあげれば良いという感じです。あくまでも判断はご本人。今のところは、みんな大変感動してくれています。

市長： それは皆さんのコーディネートが素晴らしいからですね。

井下： 今のところは、民間と行政ができることをしっかり分けて対応していますので、そういう意味では非常にラッキーです。

市長： 市としても、移住される方が1人でも増えて、そういった方からクチコミで旭川を宣伝してもらおうことができるのは本当に素晴らしいと思っていますので、今後さらに進めていければと思います。

北口： 移住してきた方がどう伝えてくれるか。やはり人の評判が一番大事な部分だと思います。

市の担当職員ともよく話していますが、ありのままの旭川を見て知ってもらいたいですね。都市から多少離れた町村にいくと、移住支援策で住宅や土地が無料とか聞きますが、それで来てもらったとしても正確な判断ができないようになってしまうと思うんです。そういうものがなかったとしても、ありのままの旭川をきちんと伝えて、例えば仕事でいえば給料は下がるよとか、そういう部分もお伝えして判断して来てもらう。本当に納得していただき、その方たちが自分の体験を通じて情報発信してもらうことが今の旭川の魅力を伝えるのには一番いいのかなと思います。

そのためには、「失敗した」と思う人を作らない。褒め言葉よりも悪口の方が広が

りますから。団塊世代の移住が取り上げられる前に北海道移住が注目されはじめた中で、いわゆるカントリーライフに憧れて移住した人の中には、自分で望んできたのに「こんな場所では生活できない」と悪口ばかりホームページに書く人もいます。そういう状態は少し問題です。

だから、伝えるべきところは余すところなく伝えて、目で見ていただくところは実際に見ていただいて、その上で来ていただくというスタンスが大事だと。そうして来た方は、情報発信という意味で、本当に旭川の宣伝マンになっていただけたらと思います。その方々を大事にして、我々の組織などで行う懇親会などにも来ていただいて、行政の担当者や私たちも情報交換をしながら、次の段階に進んでいければいいなと考えています。

市長： これからも是非連携してやっていきたいと思います。PRの方法や範囲ももっと広げていくことも考えられますね。

北口： 予算的な問題などから、どうしても今はインターネットを中心にした情報発信に頼らざるを得ません。今後もっと幅広い年代層に見ていただくことを考えれば、インターネット以外の紙媒体なども通じて、首都圏の方々に私たちの活動とまちを知ってもらい、まずは気軽にお問い合わせをいただく。

去年か一昨年の道の調査では、東京で、何らかの形で北海道移住に興味や関心があるという人が8割いるという結果も出ています。当然、8割の人が全員という訳ではなく、そのうちの何パーセントかの人が来るということになるのでしょうか。私たちとしては、その8割の人の北海道に対する興味をうまく使いたいと思います。北海道に関心を持っている人にどんどん情報発信して、その人たちが知ること週りに広がるということもありますからね。北海道の地域ブランドというのは、私たちが考えている以上に東京ではブランドになっていますから、もっと積極的にアピールできたらと思っています。

地域コミュニティと移住希望者の橋渡しとして

西野： 現在、FMリベアで毎週1回、「カミデンネットラジオ」を放送しています。どうしてそういうことをしているのかというと、まずは市民の皆さんに移住というものを理解して知ってもらい、できればおもてなし、ウェルカムの気持ちを持ってもらいたいと思うんです。そうすると、移住した方たちも町内会や地域にうまく溶け込めるということで、地域に一役買ってくれる人が育てばと考えています。また、これはネットで配信していますので、旭川の人のお話や移住した人の生の声を配信し、東京にどんどん宣伝していこうと思っています。実験的にやっていますが、情報発信の必要性を痛感したので。

市長： 都会の人たちは、農村というと古い社会があって、よそ者はいじめられるんじゃないかとかそんな気持ちを持っているのですかね。

西野： 北海道に関して言えば、東北の一部にあるようなイメージはないみたいですね。北海道の人は大らかだねという感じで。東京の人には、最初から北海道という開放的なイメージが付いていますから、あとは旭川を宣伝していかに関心を持ってもらうかということじゃないでしょうか。移住はしなくても旭川に遊びにくるお客さんになるかもしれない。

とにかく、ネットでも直接人にでも、どんどんアクセスしてもらおうということですね。

市長： まずは期間限定でということもありますし、将来の定住につながっていくかもしれません。

藤田： そうした中で、来ていただく方々も自分から溶け込もうとする姿勢がなければいけません。それと、受け入れる側のウェルカムという双方の想いがうまく結びつかないと、摩擦が起きます。農家や大型菜園などの夢を思い描いてきた人の中には、菜園をまかない切れずに草ぼうぼうにしてしまい、周辺から疎外者にされて結局引き上げた人もいと聞きます。そこに住むために何が必要かということをしきんと伝えてあげないといけないし、いきなり慣れないまま大菜園をやろうとしても、それは簡単にできません。周囲と交わる思いと、制度や習慣などを覚えた上で、少しは近づくことができるという気がします。思いだけで来るから、周囲にその思いを受け入れる形が作れなかったとか、自分が馴染めなかったとか、受け入れる側でも、指導する人とうまくつながらなかったとか、協力体制が作れなかったということになるのだと思います。

市長： そういう方もいるのですね。今おっしゃったことはすごく大切です。場所としては、どの辺りの希望が多いのですか？

藤田： 大雪山などの山が見えるところがすごく多いですね。売りにはなりますが、全部が整うわけではないですから、違う場所にもこんなに面白いところがあるよときちんとアピールできるような感覚を取り入れる必要があります。大雪山が見えるところはその周辺のみですし、山の近くに行ったら、却って前の山が邪魔して見えないですからね。

市長： 永山とか東旭川でしたら、遠くですけど見えますね。

藤田： 動物園のずっと奥に入ると山は見えませんが、湧き水とか良いところがあるんです。だから、見えないところにそういうものがあるから、売り方や質をみんなで勉強できればと思います。この活動を通してそういうことを覚えてきました。

市長： 豊田とかその辺りは、学校の廃校など、私たちも利用方法を真剣に考えていかなければならない課題のひとつです。

藤田： そういう場所が好きという人がいるんですよ。だから、その売り手と周囲との溶け込み方を上手に伝えられて、同意ができれば、自然と人と人がつながっていきますからね。

市長： 行政が主導すると、なかなか難しい部分が出てくるのでしょうか。

北口： 地域コミュニティに望まれて来るという体制をどう作るのかだと思うんです。例えば、業者がこの物件が空いているからと単純に売買して移住してきたとなると、地域コミュニティとの接点は何もないままに入ることになります。そういう意味では、まず地域コミュニティとの顔つなぎから始まって、本当に望まれて「この人だったら、是非ここに来てもらいたい」という話ができてきたときに地域に入るというような、事前のワンクッションがあるとこういう形ができますから、それが大事なのかなと思います。

こちらに移住を希望する若い世代の人たちをはじめ、暮らしの中で何を大事にするかという価値観が大きく変わりつつあるのだと思います。そういう中で、私たちとしては、旭川がそういう価値観を実現するのに暮らしやすい地域なんですとどんどん情報発信していくことが一番大事かと。市職員の中にも向こうから移り住んでいる人がいると思いますので、そういう人が自ら行動するような仕組みができるといいと思います。

藤田： すばらしい「物好き」をいっぱい集めてね。

西野： ただ、マスコミが団塊世代をあまりに焦点にしているので、団塊世代が引いてしまっているところがありますね。自分たちの財布をあてこんだ商売というか、団塊世代向けマンションや旅行など、みんな辟易しているみたいです。

北口： 移住ということになると、最近はず構える姿勢を感じますね。

観光や修学旅行と移住の関連性

井下： 元由さんが「カムイミンタラの伝道師」のメンバーを組んでくれたのですが、全部の機能が入っていて、本当にベストメンバーだと思います。アイリンクの北口さんがホームページを作って情報発信し、現地に行くときにはJALの元由さんのパックがあります。JALに乗って旭川空港まで来て、そこからどうするかと思ったら西野さんの旭タクシーに乗って、体験メニューはうちの録画センターグループのアグリテックが作る。この体験を通じて「こんないいところに住みたいな」というときには不動産屋の藤田さんがいて、全部がつながっています。だから色々なアイデアが出てくるんですね。実は、アグリテックでは修学旅行の受入れも行っていて、これは移住と密接に関係があるんです。これは将来の移住者なんですよ。いろんな感動を旭川で体験してもらおうと。例えば、来年2月にフォーラムを募集していたのですが、今年、修学旅行で引率してきた先生がいて、偶然私が付いて名刺を渡していたのですが、「来年定年だから、こんなところに住みたいね」ということですぐに応募がありました。息子さんと2人で、息子さんが農業をやりたいということでした。あと、団塊世代のご夫婦もいて、旦那さんは今大阪で農業の研修を受けていて、奥さんも旭川に来て農業をやりたいと。その奥さんが今回のツアーに参加しましてね。奥さんが参加するということは、ほとんど決まります。大抵、奥さんの反対でだめになるんですよ。

市長： 現実的ですからね。

井下： 第1号で来たご夫妻も、奥さんがどうしても来たいということで、横浜出身の旦那さんは一緒についてきたという感じなんです。奥さんは美唄出身です。どうしても雪のない暮らしがしたくない。

市長： 私も就職で東京に行ったとき、何か景色が変だなと思いました。何が変かと思ったら、山が見えないんですよ。たまに天気の良いときに遠くに富士山が見える

くらいで山がない。旭川にいたらどこを見ても山が見えるじゃないですか。すごく違和感がありました。雪もそうですけど、そういう回帰現象というのは鮭と一緒に人間にもあるのかもしれませんがね。私もその一人です。やっぱり旭川に住みたいっていう思いが一番ありました。やっぱりそれが強いですね。

北口： こちらに來たいという東京の人に聞きますと、環境難民化してますね。もうここには住めないという感じがすごく伝わってきます。今そういう部分を大事に考えて、私たちは、地域と暮らすことそれぞれの価値観をアピールしていかなければならないですね。

北口： 井下さんのところで行っている農家体験の修学旅行を、旭川でも広げることができると思いますね。

市長： 岡山県の就実高校は来年もまた来てくれるんですね。

井下： 農家の人たちが積極的に受け入れてくれているんです。あと東旭川、米原、動物園周辺の農家の方々も積極的にやってくれています。

藤田： これからどんどん人の動きが激しくなれば、次々新しいものが出てくると思います。関係する行政も、もっと柔軟に判断ができる感覚になれば新しいプランができるんじゃないでしょうか。

市長： そうですね。私どももそういう柔軟な発想ができるようになるべきだと思います。例えば、先の話で言えば、東京の方の学校で制度化して、夏の何か月かは北海道で授業をするとかね。

西野： 飛行機を使っただけの修学旅行は今まで関西だけだったんです。今年4月から、首都圏(1都6県)で飛行機の修学旅行が認められたということで、これからますます北海道に来る可能性は増えますね。

市長： そのあたりの需要が増えると、先ほどの小中学校なども活用できるかもしれません。

藤田： 活用できますよね。向こうが夏休みのときに来て、社会人であれば短期移住・短期体験というか…。学生と父母とを絡めたり、社会人と学生の違いを相互に感じるいい機会ですから、そんなこともおもしろいかなと。

井下： この間、美深町の仁宇布(旧美幸線の最後の駅)にあるトロッコ王国に行ってきました。そこには、小学校と中学校がありまして、中学生に地元の子は1人もいないんですよ。全員が外から来ていて、多分寮みたいなものを作って、集団で通って学校を維持しているんです。詳細は調べていませんが、大抵の人がこの話を聞いたら「そうなの!？」って感じですよ。

市長： 1年間ずっとですよ。美深での前例があれば、旭川でも可能性はありますよね。

井下： 旭川は宝の山だということを誰かが発信するか教えないと。それが「カムイミンタラの伝道師」の役割なのかな。「カムイミンタラの伝道師」と聞くと何かの宗教かと思われるんですが、最初の頃は「伝導」と書いたんですけど、北口さんから「導くって何か宗教じみてだめだから『道』にしましょう」と言われて、それで「伝道」になったんですよ。いろんなところに様々なものがあって、1市8町が連携する「神々の遊ぶ庭」というのはとてもいいじゃないですか。

市長： この前、四方さんとお会いしたとき、江丹別、幌加内、新得を巻き込んでの「そばサミット」の話をされていましたよね。今日、私は幌加内に行っておりまして、町長と少しその話をしたんです。幌加内では何万人も集めてやっていますので、拠点を旭川に移してというのは少し難しいのかなと。あそこはあそこでやりつつ、また旭川でやる場合には協力してもらおうということになるのかなと思います。

井下： 四方先生が話しているのは、4条から8条までの買物公園の活性化という面で、空き店舗をうまく活用し、買物公園をオープンにしてそれをやったらいいんじゃないかと。まちおこしでそういう地域があるみたいです。幌加内など単独でそばまつりを開催しているのはありますが、北海道全域から、新得や音威子府などいろんなそばの産地を集めてやったらいいんじゃないかと。

市長： 来年度はどこかのまちの海産物と旭川の農産物を合わせて物産展ができたらという話もあります。今のそばの話なども旭川の一大イベントに成長する可能性はありますよね。

藤田： 可能であれば、イベント時に緑橋通の片側を全部駐車帯にしてしまうとか、常時片側だけをコインパーキングにすることなども考えられますね。観光バスの駐車場があつたらいいなという気もします。

市長： パーキングについては、やる気になればできるかもしれないですね。中心街にも車が来やすくなりますし。観光バスの駐車場もあつたらいいですね。

井下： 一貫して言えるのは、とにかくいろんな人に旭川へ来てほしい。留まって賑わってほしい。それでまちが潤っていく。来れば必ず宿泊代や食事代がかかたりしますので、やはりそこから活性化していこうというのが私たちの考えです。

閉会にあたって

市長あいさつ

市長： 今日は貴重なお話やご意見をお聞かせいただき、どうもありがとうございます。市の職員も同席して心熱くお話を聞いておりましたので、話の内容は私どもで整理させていただいて、そこで具体的に、今後また進めていける可能性を最大限に生かして、ぜひ今後とも連携を密にさせていただき、地域発展のために全力で頑張っていきたいと思っております。今後とも、市に対してもご理解とお力添えをいただけたらと思いますので、よろしく願いいたします。

一同： よろしく申し上げます。私たちも頑張りますので、市長も頑張ってください。

対話集会を終えて

色々話が飛びましたが、すべて旭川に関係することだったので、非常に私も刺激を受けました。

移住について、潜在的な需要があるという認識を持たせていただいたことと、意外に都会の若年層、若者がその自然環境を渴望しているということも認識できたと思います。団塊世代の話は今までも結構ありましたが、必ずしもそうではないということなんですね。

廃校の後利用についての具体的な話はこれからになっていきますし、またその地域によっても違ってくと思いますが、廃校を今後どう活用するかについては、やはり有効に活用しなければならないことですから、今日のお話の中でも非常に参考となるご意見をいただいたと思っております。

今日は第1回目の「まちづくり対話集会」でしたが、非常に前向きで活発な意見交換ができ、多くのご意見をいただいて、本当に良かったと思います。またこれからも、言いつ放し・やりっ放しではなく、まちづくりにどういう形で生かしていくことができるか、検討課題として受け止めさせていただきます。

なお、対話集会は、年間を通して20回前後は開催したいと思っております。団体以外では、地域単位で一般市民の方を対象に開催していきたいと考えています。